

「津久井やまゆり園の事件から」

2016年09月20日

7月26日、障害者施設の津久井やまゆり園で、元職員が19人の入所者を殺害し、26人に重傷を負わせる事件を起こし、社会を震撼させた。私が戦慄したことは、容疑者が障害者は殺した方が世の中のためになるというヒトラーの優生思想に取りつかれていたことである。この問題に関し、キリスト教の月刊誌『福音と世界』の10月号に「生きるに値せぬ命があるのか 津久井やまゆり園の事件について考える」と題して、5人の方々の意見が掲載されている。教えられることが多いので、紹介し、私の感想も述べたい。

河島幸夫氏は、ヒトラーは「遺伝病子孫予防法（ナチス断種法）」で約35万人に断種や中絶を強制し、不治と診断された障害者・精神病者の約20万人をガス室などで殺害していたが、これに対し決死の覚悟でブラウネ牧師がヒトラーに提出した建白書を下記のように紹介している。「人間の生命の不可侵性は国家秩序の根本支柱の一つであります。我々は助け手のない人を世話しないで見捨てるべきでしょうか。人間の生命がそれほどとるに足りないものなら、国家全体の道徳は危険にさらされることでしょう。健康な者が病人や弱者を引き受けること、それこそは真の民族共同体、最良の団体を意味するものではないでしょうか。」戦争遂行のために弱者を邪魔者としたヒトラーへの抗議は人間の尊厳が守られるところに、真の共同体があると宣言している。

重度障害児を持つ關めぐみ氏は下記のように書いている。「私は障がい者の相談支援をする中で、様々な障がい者に寄り添い、難問に立ち向かい、時には疲れ果てながらも、社会を変える一翼を担うことを天より授かった仕事と考えています。障がいを負う方々に伝えさせていただくことが、『障がい者は負の存在』と暗黙に考えている社会への精一杯の私の抵抗です。」關氏は、蔑みや上から目線の同情など、様々な形で、障害者は「負の存在」とあると見なされた経験から、上記の決意を述べている。

鳥しづ子氏は「弱さは攻撃的ではなく、互いに補うべきものとしてあるのだと思います。『強者でなくては生きる価値がない』と錯覚してきた考え方が、いかに破壊的な歴史を刻んできたかを検証しなくてはならないと思います」と書いている。弱さが人間と社会のあり方を指し示す道しるべとなる。力を誇った者たちは皆消え去ったが、十字架で殺された弱者イエスは延々と宣べ伝えられているではないか。

深谷美枝氏は容疑者を下記のように分析している。「もともと病理性の高い青年が心身ともにきつい中で燃え尽き状態に陥り、利用者に対する逆恨みのような感情を、日本社会の風潮を取り込んで稚拙に思想化し行動化したのがこの事件だったのではないか、というのが筆者の暫定的な見解である。」容疑者に責任があることは言うを待たないが、社会の弱者軽視の病理があることをしっかり認識すべきである。

永野英尚氏は下記のように書いている。「人々が“憎悪”から解放されるためには、その姿を一つの場所に集め、囲いで括り、見えなくしてはなりません。地域の中で暮らし、生活の中で、“いのち”の肯定の姿を見ることが必要です。全ての存在は、価値のある“いのち”を生きることを使命としています。それを重い障害をもつ彼ら・彼女らから知られるのです。」障害児を持つ父親が「この子はわが家で育てるように神様から贈られた恵みです」と言っていた。父子の手をつないで町中をよく歩いていた姿を思い出す。